

ニュージーランド旅行記

- ラジアータパイン林業視察旅行に参加して -
(その1)

山崎 亨 史

平成3年の11月23日から12月5日の日程で、北方林業会主催の「ニュージーランド・ラジアータパイン林業視察旅行」に参加した。今回の旅行の企画は北方林業会の宮島寛会長が立てたものである。宮島先生は私の学生時代の恩師であり、宮島先生が団長ということで18人中シルバ会（北大の林学林産の同窓会）の会員が10名を占める。

私はこれまで海外旅行の経験がなく、機会があれば行きたいと思っていたのだがなかなかきっかけがつかめないでいた（基本的に無精者であるためもある）。そんなおり、丸山性能開発科長（現加工科長）からこの旅行を勧められ、ニュージーランド（以後N.Z.）での釣りのいい言葉もあり、ふところとの相談。私費で行く旅行として40万円強はちょっと高いが、花の独身貴族、まあなんとかなるだろうと決心する。

N.Z.のラジアータパインについては学生時代に宮島先生から聞いており、ある程度の知識があったのだが、せつかくの機会であり、「百聞は一見にしかず」である。そして、この機会を他の人にもと、試験場の若い連中に声をかけて回った。その中で成分利用科の関氏には受け売りの知識で「林学出身の君は、是非ラジアータパインの林業を学ぶべきだ」と丸め込み、一緒に参加することとなった。相部屋で申し込む。

申込金を振り込む際、残金を改めて振り込むのが面倒だと金額を一度に振り込むことにして、関氏の車で銀行へ。カーステレオから何やら英語が聞こえてくるではないか。関氏は行くことを決めてから英語の勉強を始め、車の中ではラジオの英

語講座（ビジネス英会話）を録音したものを聞いているという。私も勉強しなければと思うが結局何もせず。出発の2週間ぐらい前、三井東圧に勤める大学時代の友達の結婚式で、彼の上司にあたる人の祝辞の中に、北大の出身者は英語が駄目という言葉があり、耳に焼き付いているのだが。

視察旅行ということでスケジュールが決まっているが、そのすきをねらって市内探勝の予定を組む。そのために、ガイドブック「地球の歩き方」を購入。気候は北と南の違いだけで緯度がほぼ同じため日本に似ているらしく、この時期は日本の5月下旬から6月初めごろにあたり、初夏のととてもよい季節とのこと（図1）。現在で11日間もあるのだから車に乗ることもあるだろうと2人で国際免許を取ることにする（実際には使わなかったが）。また、周りから大使館に連絡して観光の資料を送ってもらおうといいと言われ、電話を入れて観光のほか、釣りの資料も送ってもらった。

前々日までに仕事を片付け、22日に車で札幌に。一応、辞書を持参した方が良いと思い、コンサイス英和・和英辞典を丸井のカードで購入。参加案内にインスタントラーメンの持ち込みも可能とあったので、醤油味と味噌味5袋づつ買う。ちなみに、関氏は夜中に札幌。

11月23日（土）

高速バスで千歳空港へ。私の荷物は姉に借りたトランクと、デイパックと言うにはちょっと大きいザック、それに小さい皮のかばんである。空港ではリアモーターカー誘致のアンケート、抽選

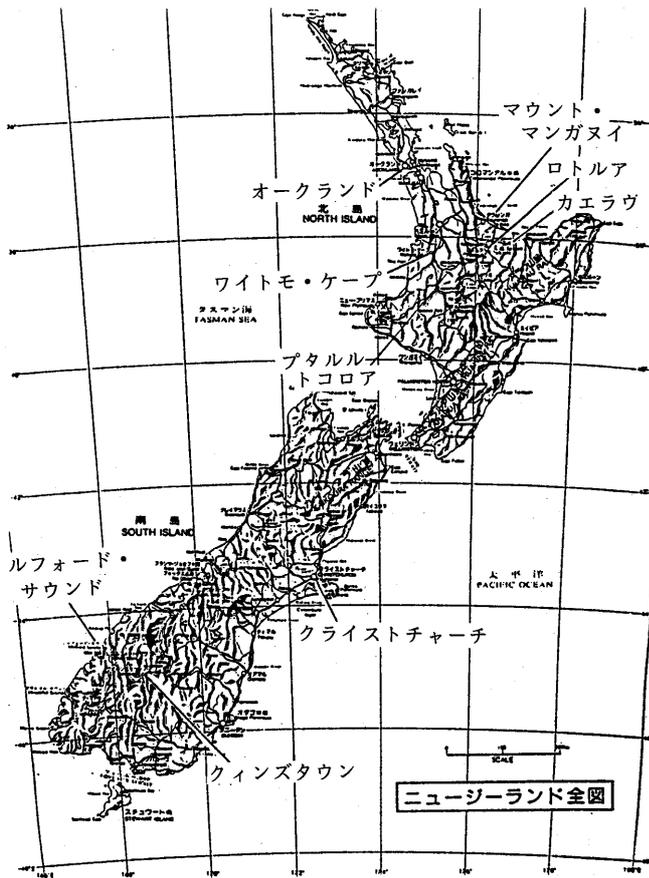


図1 ニュージーランドの地図と訪問箇所
ダイヤモンド社刊、地球の歩き方 から

でお金がもらえるとのことで記入し始めるが、結構めんどろ。関氏現る。でかいトランク。青山科長からの借り物とのこと。まだ透き間がありそうなのでラーメンを入れてもらう。添乗員のないツアーであり、あらかじめ旅行会社の人からの説明を聞く。説明が終わり荷物を預け、搭乗待合室へ。荷物はオークランドで受け取りということで、成田でのやっかいがなくて済んだ。JALの成田行に搭乗する。

- 札幌出発のメンバー（名簿順、敬称略）
- 宮島 寛 北方林業会会長。今回の団長である。また、北海道学園大学の教授でもある。
 - 川村 圭一 先生の同期。（財）北海道森林技術センター副理

- 加納 博 先生の同期。北海道カラマツ対策協議会副会長。
- 吹上 芳雄 先生の同期。測量会社の常務。
- 畠山 末吉 道立林業試験場の当時副場長。
- 綿貫 幸宏 道立工業試験場の工芸部の科長。大学の講座の先輩にあたる。
- 高篠 和憲 三笠の掘川林業の専務。
- 小泉 章夫 教育大札幌分校の講師。私が修士の時ドクターにいた先輩。今回、専門分野の通訳をしてもらった。
- 酒巻 憲央 鶴川の榊サカマキから。
- 石田真茂留 蘭越の石田産業の常務。
- 松坂 英徳 北海道営林局の若手職員。
- 関 一人 利用部成分利用科の研究職員。
- 飯田 博治 東神楽町で林業を営んで賢治親子 いる。
- 芳賀 重信 ハガ木材の社長。

このうち、私が前から面識のあるのは、先生、綿貫さん、小泉さん、関氏の4人である。

成田について東京発着の人と合流。

東京合流メンバー

平川 啓二 徳島県下の農林事務所若手職員。

小黒 正次 群馬県工業試験場工芸部の防菌に関する研究者。

N.Z. 航空のカウンターへ。N.Z. 航空のカウンターといっても日航。チケットを受け取り出国カウンター入口へ。搭乗待合室での集合時間まで時間があるが、出国手続きをすることにし、並ぶ。しかし、進み方のおそい列であった。我々の前に並んでいた人も日本人と思いきや、アジア系の外国人であった。この人たちが引っかけり、進まない。ようやく出国手続き。2人ともすんなり終わ

る。

出国審査を終え、免税店へ。海外旅行は初めてなので周りを観察する。免税店での買物は自分の名前を言わなければならないらしい。周りの客（日本人）が、私を呼んでいる。私もこんなに人気者だったかなと思い、ほくそ笑む。するとそこでは私が数千円で売られているのではないか。しかも安い。関氏との折半で我々も買うことにする。「何にします。」「山崎。」すると店員は奥へ。私は、「名前を言っただけなのに」と言おうと思ったが、それより先に店員がサントリーウイスキー「山崎」を差し出す。これがサントリーの山崎工場で作られたものであることは知っていたが、高くて手のでないものであった。

搭乗待合室に着く。我々より先に入国審査を済ませたうちのツアーの人が居る。話をすると、ハガ木材の社長と分かる。

集合時間になるが我々3人の他には誰も来っていない。もっとも、出発時間が遅れているから問題はないのだが。そうこうしているうちに、三々五々と集まってくる（三々五々だと全部で16で先に居る3人を合わせると19で1人多いぞなどと固いことは言わないように）。

搭乗準備が整い、機内へ。いざ出陣。スチュワーデスはみな外人。当然、案内も「Ladies and Gentlemen…」である。と思ったら、しばらくして日本語を話す男の声。1人だけ日本の客室乗務員がいたのだ。

飲物のサービス。まずは「ビア」を頼む。日本のビールもあったがやはりN.Z.のビールを。ビールと一緒に「おつまみ」と書いたおかきが配られる。N.Z.航空の飛行機であるが、JALとの共同路線で日本でこれらは用意しているようだ。この後メニューが配られ、寿し各種と書いてありどんなのかと期待していたのだが、3cm角程度の押し寿司3個。まあ、間違っていないのだが。

途中でN.Z.時間に合わせる。N.Z.はサマータイムであることも入れて4時間日本より進んでいる。つまり、食事を終え落ち着いたのは日

本時間で9時であるが、N.Z.時間では夜中の1時なのだ。

11月24日（日）

午前オークランド国際空港着。千歳で預けた荷物を受け取る。綿貫さんの荷物に張った「WATANUKI」のシールが「TANUKI」になっている。作意的な仕業か？入国手続き。よく分からないが前の人についていきすなりと。現地日本人ガイドとバスの運転手に迎えられる。日本円をN.Z.ドルに両替。1ドル80円弱。日本人ガイドによれば、1ドルコインを100円玉、10セントを10円玉と思えば良いとのアドバイス。バスでオークランド市内観光。オークランドは百万都市。ここには自動車専用道路がある。この国はイギリスの影響が大きく車は左側通行である。車は国産がなく日本車が多い。車の値段は日本の2倍ぐらい。風景はポプラなどがあって北海道と似ている（写真1）。イーデン山の展望台へ。ここはオークランドの真中にあり、ぐるっと見渡せる。N.Z.は平屋が多く、1軒当たりの土地も広いので札幌より広く感じる。ちなみにこちらの人達は中古の家（もちろん土地付き）を買い、日曜大工で改装し高く売り、少し程度の上の家を買うということを繰り返していたそうである。それにしても寒い。夏を期待してきたのに高々200m程度でこんなに寒いとは。

街のあちこちに赤い花が咲いている。ガイドの話によればこの時期赤い花をつけるポフツカワ（*Metrosideros excelsa*）はこちらのクリスマスツリーになっているとのこと。夏のクリスマスもなかなか良さそうである。

オークランド博物館を見学。一階の正面には先住民族であるマオリ族（先住民族）の木彫りの船や建物の展示がある（写真2）。この日はマオリの歌と踊りが披露されていた。英語で説明しているのだが、マオリなまりなのかよく分からない。小泉さんも聞き取りづらいようであった。戦争記念博物館でもあり、世界に現存するものが3機しかないゼロ戦1機を展示してある。他に動植物の展

示など。写真 3は土着の針葉樹リム (Dacrydium cupressinum) , 樹齢約500年。自由に見学する時間があり, 昆虫などの展示を探すが改装中のようで, 案内図通りの通路がない。

博物館の売店で絵はがきを買ったら, 1枚の値段から計算した額とおつりが合わない。こちらでは消費税が12.5%でありこの関係なのかとも思っ

たが, 関氏に聞くとそのままの額だったので, カウンターに戻りおつりが足りないことをなんとか伝え, 正しい金額のおつりをもらった。旅行を通して分かったが, 消費税についてはほとんど内税法式で値段に組み込まれていた。

バスで海が見渡せる丘にある高級住宅地を見学。眺めはすばらしい。こちらの人はヨットなど船を持っている人が多く, 車にも船のトレーラを付けられるようになっているものが多い。船は比較的安いようである。

ホテルはオークランド郊外のポーテージ・ペンシユラ・モーター・ホテル。ホテルの名前のペンシユラは英語で半島のことであるが, きっと半島にあるのだろうが, どこなのか良く分からない。睡眠不足のため風呂に入り一眠り。とは言っても, 関氏が風呂に入っている間の5分ぐらいの間。その後, 近くを散策に。オークランド市街地は遠く, ホテルを出て店のありそうな方に向かう。途中犬を散歩させている人を見かける。紐を付けていないが, 日本の犬みたいにはしゃがず, 飼い主の横をゆうゆうと歩いているのだ。絵になっている。

何か食べるものを買うため小さな店に。何か変わったものはないかと店の中をうろついていると, マオリのオバさんの店員に何か聞かれたようだが, 何と言ったか分からないので気づかないふりをする。店内を見回すがまた話しかけられたら困るので, パンの棚からレーズンの入ったマフィンとポテトスナックを買う。店を出てぐるっと回ってホテルに帰ろうと街をぶらつき適当なところで路地に入る。住宅の玄関前に大きな犬。よく見るとつながれていないようである。やはりこちらの犬はすばらしい。袋小路だったため引き返す。日曜のためほとんどの店が休み。開いているのは買物したところぐらいである。

ホテルのレストランで会食。シーフードディナー。宮島先生のおごりのワインでN.Z.の夜に祝杯。私のメインは鯛のよう。関氏のはホッケの味がする。窓から外をみると8時だというのにまだ明るいようである。

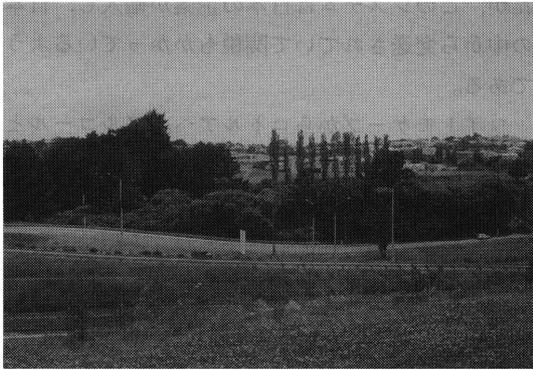


写真 1 ニュージーランドの風景



写真 2 マオリ族の木の建物

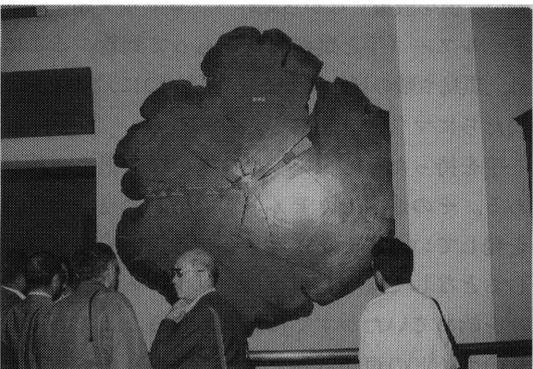


写真 3 土着の針葉樹リム (中央に宮島先生)

この後芳賀社長の部屋で宴会、私は名札「山崎」をひっさげて乗り込む。共食いならぬ共飲み。つまみが欲しいという声で、ポテトスナックを開ける。まずい。油がおもたい感じ。油の質が悪いのであろう。

11月25日(月)

朝、前の日に買ったマフィンを食べる。うまくない。

出発前に木材を使ったセンスの良いホテルの正面で記念撮影。しかし、写してもらったつもりが写っていない。写真4は客室。

オークランドからワイトモケープへ。ワイトモケープは鍾乳洞でツチボタル(Glow worm: Arachnoempha Luminsa)で有名。鍾乳石はあまりたいしたことがないが、ツチボタルはすばらしい。まるで銀河のよう。この虫は日本のホタルとは全く違うもので甲虫ではなく、蚊のような虫の幼虫



写真4 ホテルの外観

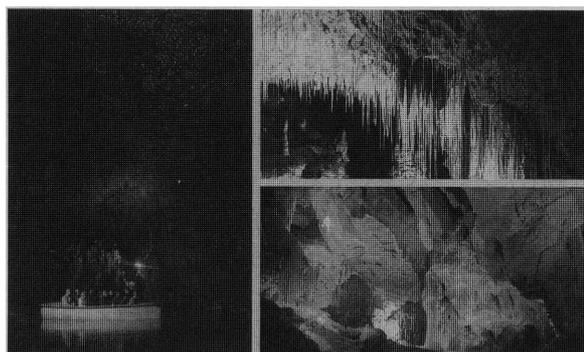


写真5 ワイトモ鍾乳洞のツチボタル

が青白い光を放ち、その光に誘われぶら下げている粘着性の糸にへばり着いた虫を餌としている。ここは写真禁止なので(禁止でなくてももうまく写せない)、絵はがきで紹介する(写真5)。

昼食は近くのレストランでバーベキュー。キウイワインを試飲させお土産にどうだと売り込み。関氏と二人で送ることにする。しかし後で分かったが、このシステムは日本の企業が輸入し、日本の中から発送されていて関税もかかっているようである。

ワイトモケープからロトルアへ。アルコールと疲れのグロッキーで半分寝てしまう。ロトルアにつき、ホテルに向かう前にマーケットに寄る。どうせこの後自由時間で街に出るからと思い、買物せず、他の人達は朝食やワインなどを買い込んでいた。

ホテルはガイザーランド・リゾート・ホテル。ポフツガイザー(間欠泉)のすぐ近く。吹上さんがgeyser landを見て「芸者ランドみたいだ」と。こう言っていたことが後に響くとは。ちなみにガイザーとは英語で間欠泉のこと。

ホテルのレセプション(受付:日本というフロントのこと)でタクシーを呼んでもらい、タクシーで街の釣り道具屋へ。しかし、5時を過ぎており、ライセンス手に入らず。運転手がげげんな顔をしていたのは、5時すぎで店がしまっているのに何だこいつらはという意味だったのだろう。タクシーの値段は初乗り自体が安く、メーターはこまめに上がるが、1区間20セントでありやはり安い。街を散策しながら湖畔へ。ロトルア湖にロッド、ルアー(竿と疑似餌)をもって到着。ここには、黒鳥や鴨のほかにかモメ(湖なのに)もいる。鳥たちにマフィンをやろ。

竿を持った自転車の少年2人の後を追う。藪がある。その途中でカモメの繁殖地を発見、警戒音を発している。そこにマフィンを投げてやると少しおとなしくなる。少年たちはボートの桟橋で釣りを始めていたがすぐに居なくなる。ここには釣りのガイドの車が数台とまっている。1台のボートが帰岸。船長の他に3人。老夫婦とその娘か?

ニジマス7尾の釣果。湖の地図を見せて釣れたポイントを片言の英語で聞く。この後話好きの老夫婦は我々にいろいろ質問してくる。私がデイバックを背負っていたので、「バックパッキングか?」と。これに対し「Tour」と答えると、「何人のツアーか?」「他の連中はどこだ?」「どこのホテルか?」などと。そして「何日間のツアーか?」の質問に「About two weeks .」と答える。この後じいさんの「何日目だ?」の質問に2日目を表すため指を2本立てると、ばあさんは「two weeks .」と言ってうなずいていた。やはり意思の疎通は難しい。その老人は「日本に住友3Mがあるだろう。それは元々アメリカの3M社で・・・」と書いていたが後半よく分からなかった。もしかしたらアメリカから来た3Mの役員だったのかもしれない。そんなやり取りの最中船長は魚をさばっている。そして彼らは車の中へ。ひきあげる途中、船長が車から降りてきてパンフをよこす。よく見ると日本で大使館から送ってもらった資料にもあった釣りのガイドのパンフで、船長はその本人であったのだ。

湖畔から街に向かってぶらぶら。ガバメント・ガーデンには芝や樹木の他にトーテムポール(写真6)も。芝生でできた何かのコートがあり、看板を見るとボーリング場と書いてある。

ちょうど建築中の建物を見つけ建築方法を観察。材の寸法と間隔からするとどうやら2×4工法らしい。しかし、壁は合板を張りパネルにして建て上げるのではなく、柱に組み合板を張らずスタッド(縦柱)を転び止めとなる横木でつないで建て上げてあった(写真7)。

この時は知らなかったが翌日の見学先のロトルア市議会などのある官庁街を通過して再び繁華街へ。

夕食は各自でということ(とはいっても各自で食事するのに不安な人のためにホテルのレストランでの時間設定はされていたのだが)、2人で何を食べるか相談、街をさまよう。先にピザ屋を見つけていたのでそこに向かう。チェーン店のピザハットである。関氏がテイクアウトにしてホテルで食べようと言うのでそれ用の入口へ。こちら



写真6 トーテムポール

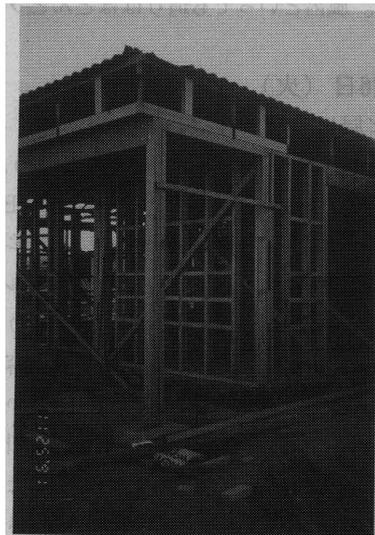


写真7 2×4工法の建物

では、どの店も「TAKE OUT」ではなく「TAKE AWAY」となっていた。ピザを注文し名前を告げると「お前らは日本人か?」(英語で)と聞かれ、そうだと答えると「俺は分かるんだ。何たらかたら」と。良く分からないがどうでもよいことなので適当にごまかす。次にビールを買いに酒屋へ。350ccの缶ビールの定価が2ドル弱(約150円)。安い。

こちらでは流しのタクシーはなく、店から呼ぶかスタンドで拾う仕組みであり、日本人ガイドに聞いたバスセンターの前で乗る。

ホテルに帰りつき、ビールを飲みながらピザを食べる。少し物足りないのでラーメンを食べる作戦を立てる。電気ポットは置いてあるが直にラー

メンを入れるわけにはいかない。かといって食器に入れてお湯を注ぐにも食器がない。ここで缶ビールの存在である。関氏が缶切を持っているとこので缶の上を開け食器に。こちらは200ボルトであり、お湯が沸くのも早い。缶の中に麺を割って詰め込みお湯を注ぐ。しかし、やわくならない。そこでそのまま電気ポットに入れ加熱、湯煎である。

ご報告のため宮島先生の部屋へ。綿貫さんや小泉さんがいる。報告しながらお酒をいただく。小泉さんたちが風呂に入るので一緒に入ることにする。風呂といっても造りはほとんどプール。

11月26日（火）

テレビ局は3つしかないようである。2人ともチャンネル・ツーを気に入ってしまう。特に朝の6時半ごろから始まる朝一の番組「Bright Sparks」がおもしろい。子供向けの科学番組であるが英語の勉強になる。ある日のタイトルはソーラーシステムとなっているから、てっきり太陽エネルギーについてかと思ったのだが、内容を見ていてそれらしいことにはならず、星についての話しであった。これはもしかしてと辞書を引いてみるとsolar systemとはやはり太陽系のことであった。このように勉強になるので毎日早起きすることになる。それにしても月～金で30分の放送を作るのは大変だろう。

いよいよ視察の始まりである。予定まで少し時間がありバスで市議会に向かう途中、ロトルア湖へ。前日最初にたどり着いたところである。前の日にガイドに釣りのライセンスなどについて聞いたところ、この日運転手も釣りをするとのことを教えてくれ、運転手に設定をお願いする。目的地に向かう途中日本人ガイドとおわかれ。議会前にてForest Research InstituteのDr. WalfordとDr. Cownのお迎え。助役の案内により市の庁舎を見学する。ニホンカラマツ、ベイマツ、ラジアータパインなど木材がふんだんに使われている（写真8～10）。市長との懇談にはコーヒー、紅茶の他に菓子（ケーキ類）も出される。こんな

おいしいものがあるんだったら朝飯は要らなかった。市長からこの地方の林業について伺う。ロトルア地域は、約120年前にタラウエア火山の爆発により、火山灰が降り積もった。このような土地の利用として牧畜も考えられたが、火山灰の地質に牧草があわない（コバルトなどの微量成分の不足による）こともあり植林地となり、ロトルアのワカレワレワで有用樹種の植栽実験が始められた。そしてこの地に森林調査研究所（Forest Research Institute : FRI）が建てられたとのこと。

窓から庭園のボーリング場での競技が見えるが、ルールは分からない。あとでガイドブックを



写真8 吹き抜けになっているホール（カラマツ使用）

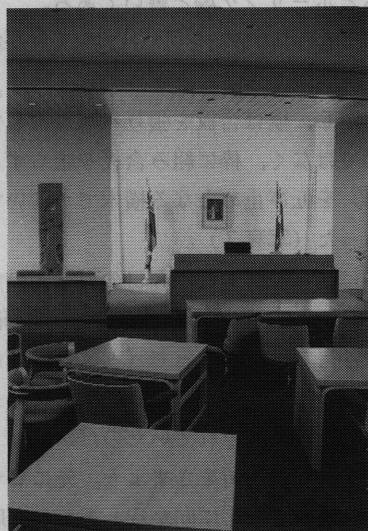


写真9 市議会の議事室
（左にマオリ族の彫物）



写真 10 ハイヒールで痛めつけられた床板
(ラジアータパインと思われる)

見たらローンボールと書いてある。

ワカレワレワのレッドウッド (Sequoia sempervirens) 保存林を見学 (写真 11)。立札によれば、このレッドウッド林は2つの世界大戦で命を失ったN.Z. 森林事業の男たちに記念として非公式に奉納されたものである。現在面積は6haあり、1901年に植栽された12haの一部である。1939年に15mの高さまで全て枝打ちされた。最も樹高の高いものは57mで、直径170cmある。この中で最も生長がよいのは土壌が最も深い斜面の麓であ

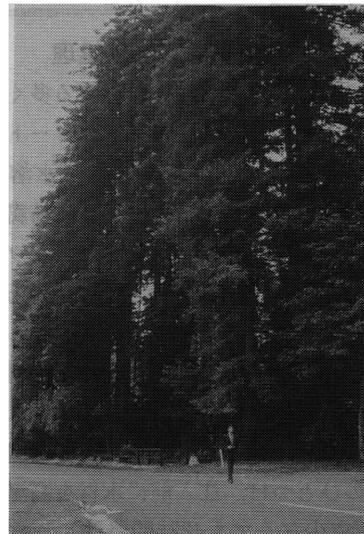


写真 11 レッドウッド
(人と比較するとその高さが際立つ)

るとのこと。この木もアメリカ合衆国の太平洋岸から導入されたものであるが、生長は良いが密度が低く構造用とはならない。また、本来の特徴である耐朽性も失われたため利用価値が低く、現在はここに保存林として残されている程度らしい。

(林産試験場 製材料)

